国語・算数・理科・デザイン！

秋田県
2020

問〕

以下、秋田県章の図案は、
何の造形に由来するものか答えなさい。

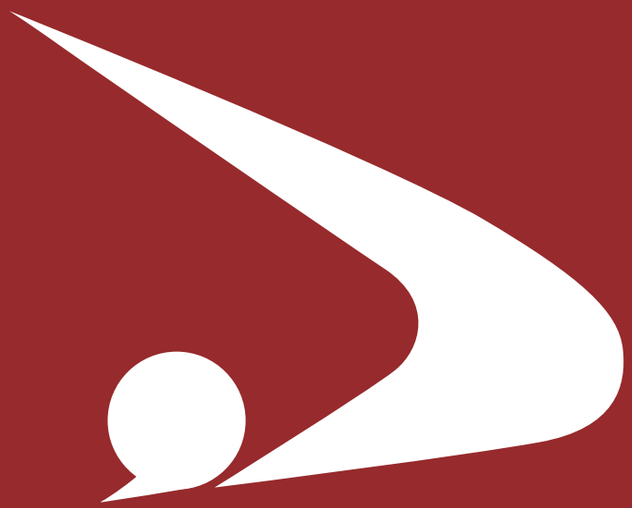


表 1

見てはいるけど、見えていない
見たことあるけど、気にとめない
そんな、当たり前すぎる私たちの毎日。

秋田県の県章を見たことはある、
でも、そのカタチの意味まで
知ろうとはしなかったし
気にもとめず、考えもしなかった。

きっと、私たちの周りにはこの県章のように
まだ〝見たこと〟がないものに溢れている。
住み慣れた家も、近くの商店街も、日々通う学校も、
近所のおばあちゃんも、路地裏の野良猫も……
もしかしたら、どれもこれも
私たちに〝見られる〟ことを待っている。

若者と地域をつなぐプロジェクトと題した
本企画『**国語・算数・理科・デザイン！**』は、
そんな普段の自分には〝**見えていない**〟ような
モノを見つけにいく、半年間の小さな旅。
足と手を動かし、耳で聞いて、肌で感じて
仲間と毎日の隅々を実感するような学びの場。

若者と地域をつなぐプロジェクト事業

主催：秋田県あきた未来創造部地域づくり推進課
運営：一般社団法人ドチャベンジャーズ　企画・協力：澁谷デザイン事務所

akitade.jp

答〕秋田県章の図案は、アキタの「ア」の造形に由来するものです

表 4

令和２年度
若者と地域をつなぐプロジェクト事業

国語・算数・理科・デザイン！
最終成果BOOK

編集
一般社団法人ドチャベンジャーズ

トータルディレクション・デザイン
澁谷和之（澁谷デザイン事務所）

写真
鄭 伽倻（小宇宙感光）
船橋陽馬（根子写真館）| P16 / P22-23

参加チーム（全８チーム）

ゆずかきこみっくす
闇鍋
Suddenly Sisters
せんしてぃぶ
happiness
momosada
ちゃどう
Araya Melt Down

運営協力

チームOD（お尻出す）
竹内 董（一般社団法人 FROM PROJECT・国際教養大学）
松嶋 駿（NPO 法人ムラツムギ 事務局長・玉川大学）
海野大空（秋田若者活性化委員会 FROMPROJECT 秋田・国際教養大学）
佐々木 華倫（秋田大学）
進藤魁人（岩手大学）
平元 美沙緒（まちづくりファシリテーター）
澁谷和之（澁谷デザイン事務所）
柳澤 龍（一般社団法人ドチャベンジャーズ）

主催：秋田県あきた未来創造部地域づくり推進課
運営：一般社団法人ドチャベンジャーズ
企画・トータルディレクション：澁谷デザイン事務所

最終講評会の
様子はコチラ

2021年３月発行

美術館で学ぶ
私の『通学路』は、
iPhoneの画面でした。
"国語・算数・理科・デザイン!" 最終成果展 ＋ 報告会
［最終成果展］2021年3月10日～14日
@ココラボラトリー（入場無料）
［報告会］2021年3月14日
オンライン配信

問題ー教科
課題ー社会も
学ぶことに
地域を『観察する』
チカラが養える
『デザイン』の
授業があったら
いいのになあ。

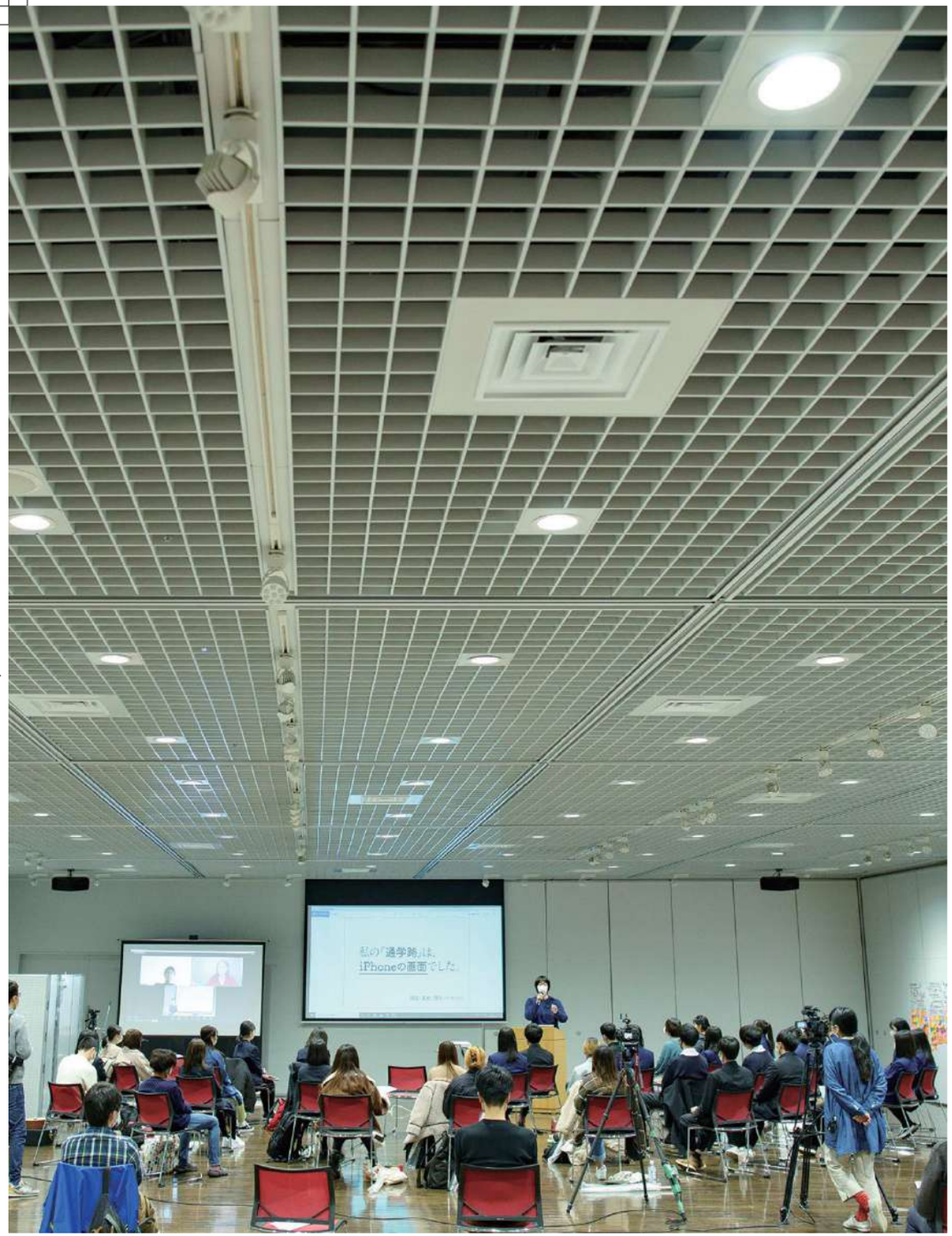
〝通学路〟を〝通楽路〟にする旅へ

『通学路』の観察を通して地域とつながる企画を立ち上げ、実践する半年間のデザインプログラム〝国語・算数・理科・デザイン!〟。県内高校・大学の合計8チームが集まり、〝観察〟を深める課題にはじまり、通学路（地域）とつながるきっかけを掴む取り組みを半年間じっくりと進めてきました。

秋田の高校生をはじめとした若者たちにとって、地域の日常を素直に〝見ること（観察）〟を通して地域を実感し、そこに寄り添う気持ちを育むことはとても意味のあることだと思います。

本プロジェクトブックでは、8つのチームが通学路の観察を通して立ち上げてきた企画を紹介することはもちろん、彼らが半年間、地域とつながるためにもがき続けてきた〝葛藤の過程〟も一つの価値としてご紹介します。

地域活性化の取り組みが溢れる中で、〝地域とつながる実感〟を模索し、泥臭く汗をかいた8チームの軌跡と、成長していくその過程を、ここにご覧頂けたら幸いです。



バズらせない回覧板

ゆずかきこみっくす

壊れるって なんですか？

大曲農業高校野菜部からやってきた2人「ゆずかきこみっくす」。最初のプレゼンテーションで大曲のフードロスへの取り組みを紹介。野菜部の視点から通学路を観察したのに、審査員からいきなり「野菜（農業）から離れてみよう」「真面目に考え過ぎてるから、壊れてみて！」とコメントされてお先真っ暗……。部活担任に泣きつき「先生、壊れるってなんですか？」と相談し、自分たちの専攻分野である農業から離れ、再度通学路に通い詰める。

地元大曲の商店街で入ったことのなかった気になるお店に片っ端からインタビューし、何度もアポなしで訪問！ お店の方々の好意にも支えられこの『回覧板』が完成。なぜ『回覧板』だったのか？そこには壊れた末に進化した、地域を想う二人の気持ちが溢れている。

【回覧板のデザイン・印刷のご協力をいただいた、地元大曲の印刷会社「（株）仙北印刷所」組版部の方からのメッセージ】大農さんの通学路上に所在し、大農卒業生も数名在職しております。当社といたしましても今回のパンフレット発行に関しましては特別な想いが致しました。制作を担当しました私の愚息も大農既卒生ですので、活動したお2人の学生の方々が我が子のような感覚に陥り（笑）平常以上に制作に力を入れさせていただきました。最終報告会および展覧会が盛会となりますよう祈念しております。

《二人の想い》

いっぺつぐらねぇでも、バズらせねぐっても、おもってることつだわればいいんでねぇ？

（大量生産しなくても、ネットで不特定多数に広めなくても、思いが伝わればいいんじゃない？）

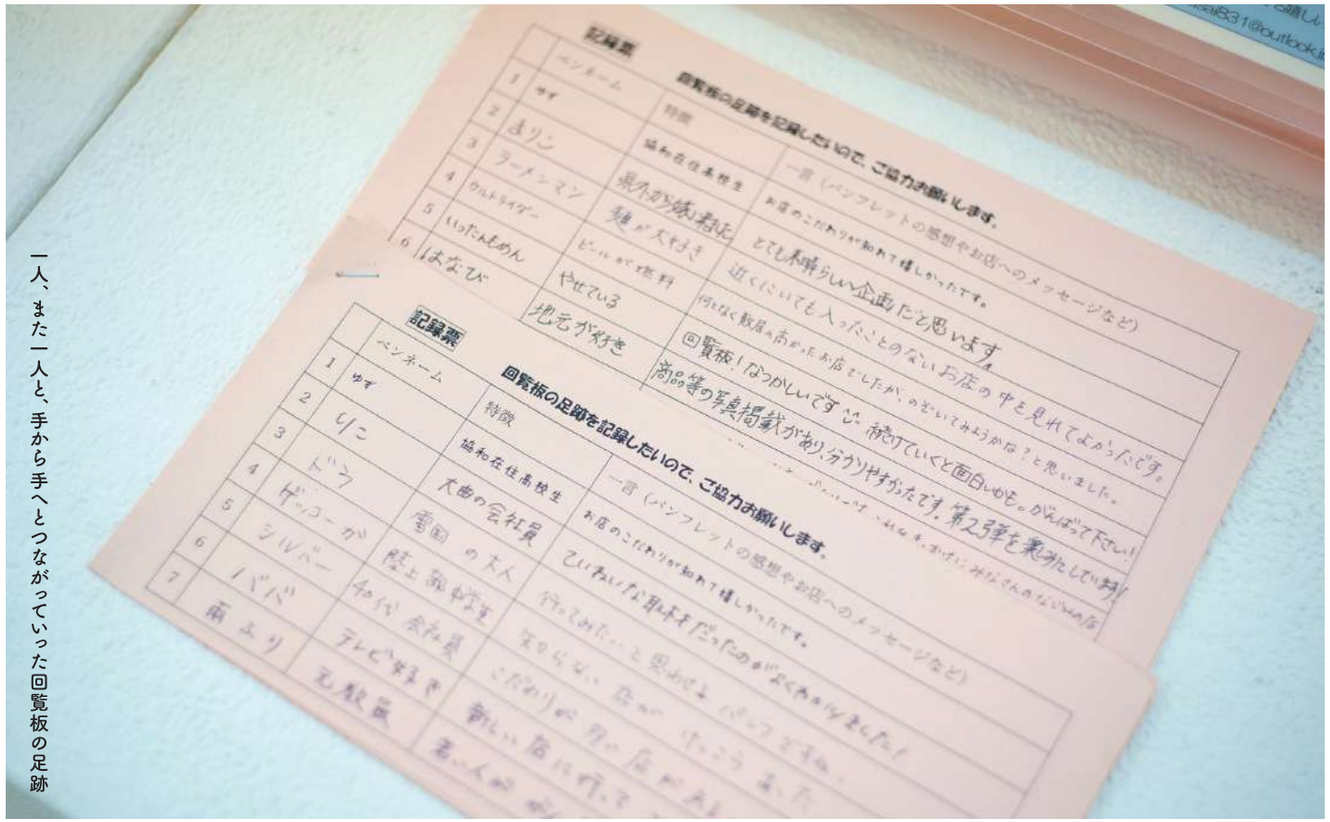
私たちは令和2年9月5日から、「若者と地域をつなぐプロジェクト事業～国語・算数・理科・デザイン！～」に参加し、通学路について深く考えてきました。

そこで、〝「大曲は花火しかない」と思っている人が多いことを何とかしたい〟という思いが生まれました。実際に大曲駅から大曲農業高校までの通学路を歩いてみて、「こんなお店があったんだ！」と気づくことが多く、気になったお店に勇気を出して足を運んでみました。すると、とても素敵なお店ばかりで、「もっといろいろな人に知って欲しい」と思いました。さらに、お店の方にこだわりを聞く中で、「コストやスピードが重視されている現代において、ここまで質にこだわって作ってくれている人たちは素敵だ」と思いました。

そんなお店の情報を皆さんに知ってもらうためのツールを考えた時、一瞬で全世界に配信できるネットを利用することは「何か違う」と感じました。そこで考えたのが回覧板です。昔ながらの手間のかかる情報伝達手段ですが、手渡しすることで関わりが生まれ、ぬくもりが伝わると思いました。

この情報を必要としていそうな方にピンポイントで伝えることができますし、さらに受け取った方の気持ちを発信者にフィードバックしていただくこともできると思いました。

これは、私たちの実験であり、挑戦です。このチラシを受け取った方に少しでも、私たちの通学路にある素敵なお店や素敵な人の魅力が伝わることを祈っています。



一人、また一人と、手から手へとつながっていった回覧板の足跡

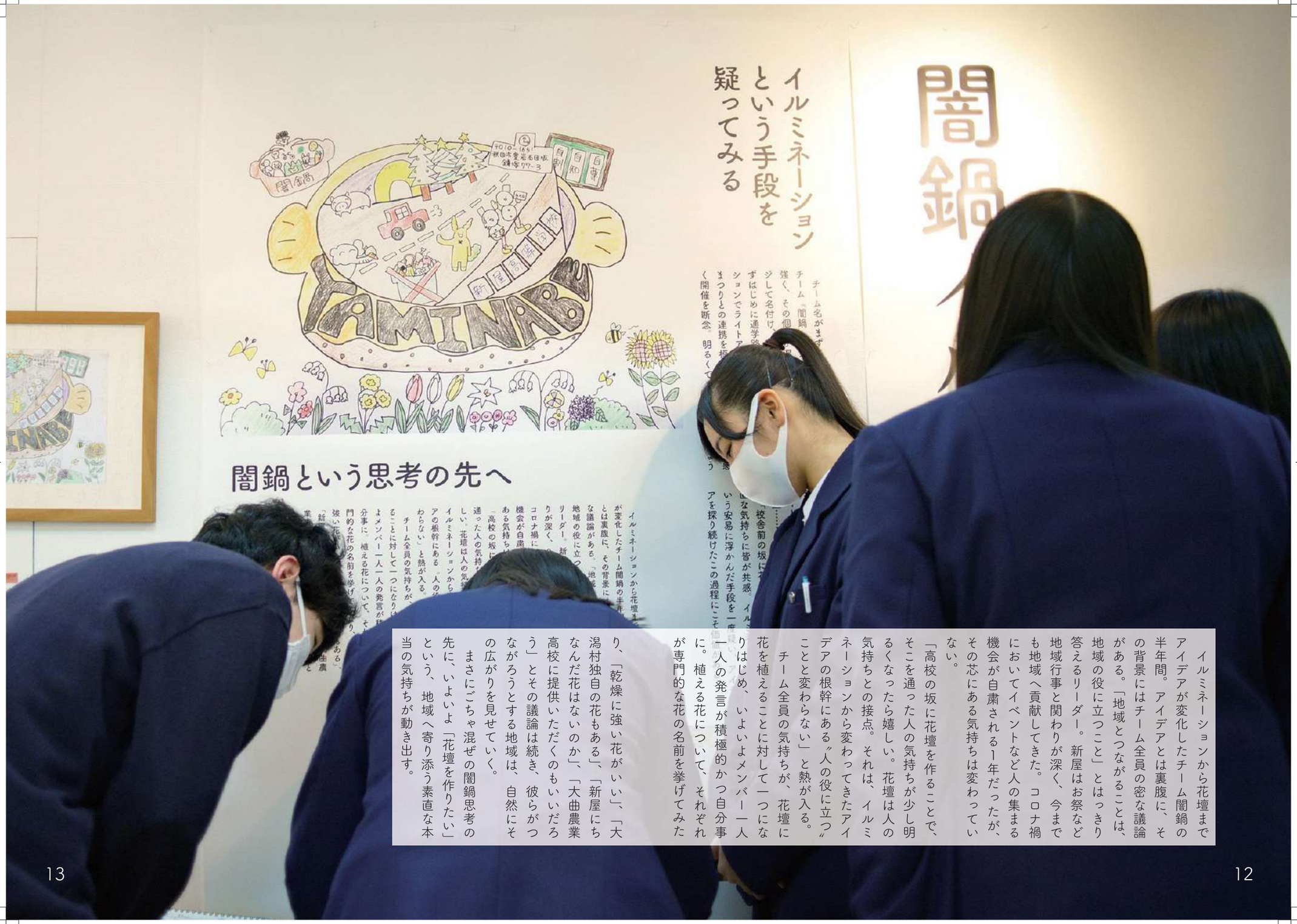
【ゆずかきこみっくすの二人が所属する、大曲農業高等学校野菜部の担当教諭・入江香織先生からのメールメッセージ】「感動」の一言です。私が、公教育の中でできればいいのになと感じている「答えを与えず考えさせる、コーチングしながら各自のwell beingを達成させる。」仕組みがある事業だと感じました。とても気をつかう、恐怖を伴う、パワーのいることだったと思います。ゆずかきの二人はもちろん、他グループの皆さんも全員に大きな成長が見られたと思います。本当にありがとうございました。是非20年続けて下さい。私も生徒派遣し続けられるように頑張ります。沼山ダイコンとか無人販売とか花壇とか、野菜部とコラボしてほしいなとも思っています。

闇鍋イルミネーション

闇鍋

「イルミネーション」という
ある意味、形骸化した手段を疑ってみる

チーム名がまず気になる新屋高校の生徒会チーム『闇鍋』。「メンバーそれぞれの個性が強く、その個性が混ざり合う感じ」をイメージして名付け、結成されたこのチームは、まずはじめに通学路にある新屋駅をイルミネーションでライトアップしたいと考え、新屋雪まつりとの連携を模索するもタイミングが悪く開催を断念。明るくできないなら温めようとホッカイロ等を配る企画も立てたがそれも却下……。続いて新屋にある大森山動物園のフードロスの取り組みに着目し企画を練るも頓挫……、そしていつの日か1人のメンバーの「校舎前の坂に花壇を作りたい」という素直な気持ちに皆が共感。イルミネーションという安易に浮かんだ手段を一度疑い、アイデアを探り続けたこの過程にこそ価値がある。



イルミネーションから花壇までアイデアが変化したチーム闇鍋の半年間。アイデアとは裏腹に、その背景にはチーム全員の密な議論がある。「地域とつながることは、地域の役に立つこと」とはっきり答えるリーダー。新屋はお祭など地域行事と関わりが深く、今までも地域へ貢献してきた。コロナ禍においてイベントなど人の集まる機会が自粛される1年だったが、その芯にある気持ちは変わっていない。

「高校の坂に花壇を作ることで、そこを通った人の気持ちが少し明るくなったら嬉しい。花壇は人の気持ちとの接点。それは、イルミネーションから変わってきたアイデアの根幹にある〝人の役に立つ〟ことと変わらない」と熱が入る。

チーム全員の気持ちが、花壇に花を植えることに対して一つになりはじめ、いよいよメンバー一人一人の発言が積極的かつ自分事に。植える花について、それぞれが専門的な花の名前を挙げてみたり、「乾燥に強い花がいい」、「大潟村独自の花もある」、「新屋にちなんだ花はないのか」、「大曲農業高校に提供いただくのもいいだろう」とその議論は続き、彼らがつながろうとする地域は、自然にその広がりを見せていく。

まさにごちゃ混ぜの闇鍋思考の先に、いよいよ「花壇を作りたい」という、地域へ寄り添う素直な本当の気持ちが動き出す。

幕を下ろすので結構です。

Suddenly Sisters

由利本荘から説明会へ一人で参加した女子高生。オンラインで参加した八郎潟在住の大学生を見つけて、「一緒に応募しませんか？」と声をかけ、突如結成された姉妹ペアこそが「Suddenly Sisters」。道路を観察して気になった溝があると、どうしてもその溝の意味が知りたくて役所へ電話までしちゃう行動派。

そんな二人が通学路にある老舗のお店を巡り、長年お店を続けられている秘訣をインタビューするものの、お店からはあまり好意的な反応が得られず……。「お店を元気づけたい！」という気持ちから、良かれと思ってお店の宣伝チラシの企画を持ちかけるもお店からは断られてしまうという顛末……。地域のリアルに直面し立ち止まってしまった2人の、もどかしくもアツい感情がここにある。

【二人が今回のプロジェクトを進めていくなかで、「体験記」として卒業文集のようにまとめ、地域に配布してもらおうと市役所へ相談に持ち込んだ当初の原稿の一部】

由利本荘市内には１００年を超える酒屋や酒造所がある。武源にお話を聞きに伺ったが、「最近はスーパーやコンビニでお酒が購入できるようになったため、売り上げ自体が減ってきている。一族でお店を守ってきたが、最近の商売は大変だから子供たちには継がせないつもり」と話された。これは酒屋だけではなく精肉所や魚屋でも同じことではないかと考える。また１００年を超える歴史をもつお店も後継者不足により閉店を余儀なくされつつある現実を目の当たりにした。さらに詳しいお話を聞かせてくれないかと再び訪問するが、「現代で幕を下ろすし、結構です」と店主から言われた。１回目の訪問では都市開発の話やお店の話をよく話してくれたため、２回目も受け入れてくれると考えていたが、真逆のお返事になにも言えなくなってしまった。「せめて歴史を振り返り思い出作りでも」と提案するが、それもダメだった。

私たちの由利本荘

わたしたちの活動

秋田県が主催する「若者と地域をつなぐプロジェクト事業〜国語・算数・理科・デザイン！〜」に参加し半年間活動してきた。日々通学路の観察を続ける中で、地域への関心がうまれ疑問がでて、その疑問に向かって企画・表現することを目指してきた。私たちなりの「地域とつながる」を表現したい。

段の上の大きな石、なんであるんだろう

通学路

羽後本荘駅周辺を散策し浮かび上がってきた疑問は「潰れた店が多い中で続いているお店はなんで続いているのだろう」だった。しかも続いているお店は100年を超える老舗である。そこで長く続いているお店に直接インタビューし秘訣を教えてもらうことにした。

羽後本荘駅前の精肉屋さん

主人公

・のどか：由利本荘市在住の高校一年生。教室の後ろに貼られていたチラシをみて参加を決めた。秋田のまだ気付かれていない魅力をみつけ、新しい価値を生み出していきたいと考えている。

・まいこ：秋田市勤務の社会人。神奈川から帰郷後プロジェクトを知り参加する。高校生や大学生の気づきが刺激となっている。

羽後本荘駅前の商店街

「宣伝はしないでくれ」「うちはもうすぐ幕を下ろすので結構です」と言われ、それでもめげずに今の自分たちにできることを考え続けた二人。

まずは、これまで「国語・算数・理科・デザイン！」のプロジェクトに取り組み感じてきた葛藤などを「体験記」として卒業文集のようにまとめてみた二人。そして、地元のたくさんの人に読んでもらいたいと思い、広報に挟んで全戸配布してもらおうと市役所へ相談に。担当の方からは「誰に向けて、何を伝えたいのかが不明瞭で配布できない」と断られ……、やっぱりそうだよね……と思った二人。応援したいから配布したいけど、伝わらなければ、ただの自己満足になってしまう。

そんな自分達の気持ちや判断だけでは〝宣伝ができない〟という、もどかしい状況のなかで更に自分達にできることを考えた末至ったのが、今の地域の現状を伝える「一枚の紙」をカタチにすることだった。コンビニや大型スーパーなどの競合が増え、また後継者不足である故に商売するのが厳しいという現実をそのまま伝えること。

武源

由利本荘市内には100年を超える酒屋や酒造所がある。武源にお話を伺いにいくと「最近はスーパーやコンビニでお酒が購入できるようになったため、売上自体が減ってきている。一族でお店を守ってきたが、最近の商売は大変だから子孫たちには継がせないつもり」と話された。100年を超える歴史をもつお店も後継者不足により閉店を余儀なくされつつある現実を目の当たりにした。

小園旅館

開業120年を超え現在6代目を迎えた旅館である。時代にあった工夫と料理人の得意分野のお料理が振舞われている。現在は、和食料理に力をいれている。昔から「敷居が高い旅館」というイメージがあるようで、気にしていた。最近はランチも始めてお料理だけでも食べにきてほしいと話してくれた。集客のためSNSも始めて宣伝も始めている。

田口雨具店

130年続く靴屋さんである。長く続いている秘訣を聞くが大した理由はないと話す。店主は電話帳を出し教えてくれた。「由利本荘市だけで靴屋さんは4店舗しかないが、ショッピングセンターやオンラインでも購入できるようになったため4店舗だけでも集客が難しい。商売は業種によって店舗数はだいぶ違う。例えば美容室では200軒くらいもあるのではないか」と。

まとめ

長く続いているお店はなぜ続いているのか疑問をもち、インタビューを行った結果、コロナ禍や後継者不足に悩む店舗が多いことがわかった。私たちはそんなお店の助けになりたいと感じるようになった。（宣伝したい！）結論として宣伝はできないが、私たちの活動報告としてチラシを選択した。

街を歩きいままで知らなかった昔からのお店がたくさんあることがわかった。老舗の活性化を心から願い、今あるお店を盛り上げるお手伝いをしたいし、方法を探していきたい。この体験記を読んだ方が、地元のお店に興味をもち、それが地域の活発につながったら嬉しい。

この一枚の紙は、今現在なんとか生き残りをかけて奮闘している地域のお店の現状を伝えることで、今ある地域のお店一軒一軒を大切にして欲しいという願い・メッセージであり、一過性の宣伝ではないというところが、二人がもがきにもがいて行き着いた本当のデザインである。

地域のために
良かれと思ったことが
必ずしも
地域のヒトにとっては
心地良いものに
ならないことがある

【Suddenly Sisters の二人に丁寧にご対応くださった由利本荘市役所の加藤淳子様とのメールのやりとり】お世話になっております。本日、「国語・算数・理科・デザイン」に参加しているという黒田和花さんとまいこさんが来庁されました。おふたりが事業の成果として市内の商店に行ったインタビューをチラシにして、広報ゆりほんじょうを使い全戸配布したいということで連絡があり、担当課として対応しました。話の中で、柳澤さんがおふたりのメンターだということでしたので差し出がましいのですが今日の話の内容をお伝えいたします。結論として、今回市ではおふたりが作成するチラシを配布することは難しいです。「広報に同封するチラシは行政からのお知らせに限っている」ことが一番大きい理由です。しかし、これは地域振興課（当課：配布について所管しています）からのお知らせという体裁を取ればクリアできる可能性はありました。そこで、地域振興課から全市民に向けて周知するべき内容かということを判断するために詳細をお伺いしました。お話を聞いて、「インタビューした商店の方にチラシの作成について話をしていない」「チラシを配布した先に何か活動することは考えていない」ということがわかりました。そのため、このチラシを配布することにより「お店と地域との関係」「おふたりと地域との関係」「お店とおふたりの関係」が必ずしも前向きなものにならない懸念があったことと、チラシ配布を許可した場合、市でもこれらに関して責任を取ることができないと判断して、「現在の状況ではチラシ配布について課内で合意を得ることが難しい」とお伝えしました。また、率直に「チラシ配布はだれのためになるのか？　おふたりのためだけにやっていることではないのか？」ということもお伝えしました。チラシ全戸配布の代替案として「お店周辺の町内会長さんとおつなぎしてチラシを配布を検討してもらうこと」「図書館や体育館などの公共施設にチラシ設置ができるよう、おつなぎすること」や、お店や商店街とつながりを持ち続けたいのであれば、商店街で前向きに商店を営んでいる若い方とおつなぎすることはできることをお伝えしましたが、反応は芳しくないように受け止めました。全体的に厳しいお話をしてしまいましたが、由利本荘からこの事業に参加して何か行動をしようと思う高校生がいることは本当にうれしく、できる限り力になりたいと課内でも話しています。多少のことには融通がきくよう取り計らうつもりでいます。「広報にチラシを入れる」というのは本市ではできませんが、一緒に相談して進められることがありましたら協力は惜しみません。すみません。おふたりに直接つたえるべきことですが、柳澤さんの方でもご承知おきいただけると助かると思い、ご連絡をいたしました。何卒よろしくお願いいたします。

僕らの理想的無人販売所

有心（ゆうじん）

せんしてぃぶ

県外出身の国際教養大学生3人からなるチーム「せんしてぃぶ」。そのうち都会出身者の1人が秋田でよく見かける無人販売所を知らなかったことから、県内の無人販売所の観察がスタート。見つけた無人販売所は、監視カメラが設置されデコレーションされたモダンなものや、たくさん作り過ぎて余った野菜を置いてるだけの無人販売所など、3人が勝手に無人販売所に期待し、想像していたものとは程遠いものだった。固定観念を取り払うために、定点カメラを無人販売所に設置し主観を取り払おうと努力するも、取り除けない現実に気づき、内省を続けてチームは観察の迷宮に迷い込む。「観察って大変……」とぼやいた3人は原点に立ち返り、自分たちの理想に向け〝心の有る〟無人販売所を自らカタチにする。

僕らは　何も知らない

知らないこと
知ろうとしないことは
ものすごい簡単なこと

僕らは　僕ら自身のことも
何も知らなかった

知りにいこうとする
体力ってものすごいもの

そこに踏み込めないでいる
自分たちに
淋しさを感じていた

だから　僕ら自身も
地域も互いに知り合い
つながれる場所ができたら
いいなって思って作った
無人販売所「有心販売所」

僕らは
その無人販売所を
歌にしました。

「知らなくて、知ったふりして、知ろうとしてないから、寄り添えなくて。だから知りたくて、君のリアルを見せて、僕らはまだきっと何も知らないから」

（歌のサビ部分の歌詞より）

半年間、机上の空論を羅列し続け、もがきにもがき続けた頭でっかちの国際教養大生チーム「せんしていぶ」が、最後の最後に言葉にしてくれた『僕らは何も知らないんだ』という一言。

本プロジェクトの根幹にある『観察』することの難しさと本質をまっすぐに実感してくれた、大正解の歌であり、アートであり、デザインだった。

半年間の〝観察〟の軌跡

わたしたちは、何も見ていない。わたしたちには、何も見えていない。わたしたちは、自分たちが暮らす〝地域への眼差し〟を失っていたことに、この半年間で気付かされ、いよいよその先に〝地域〟を実感する。

理事長を知る

happiness

地域とつながるとは一人の人を知るということ

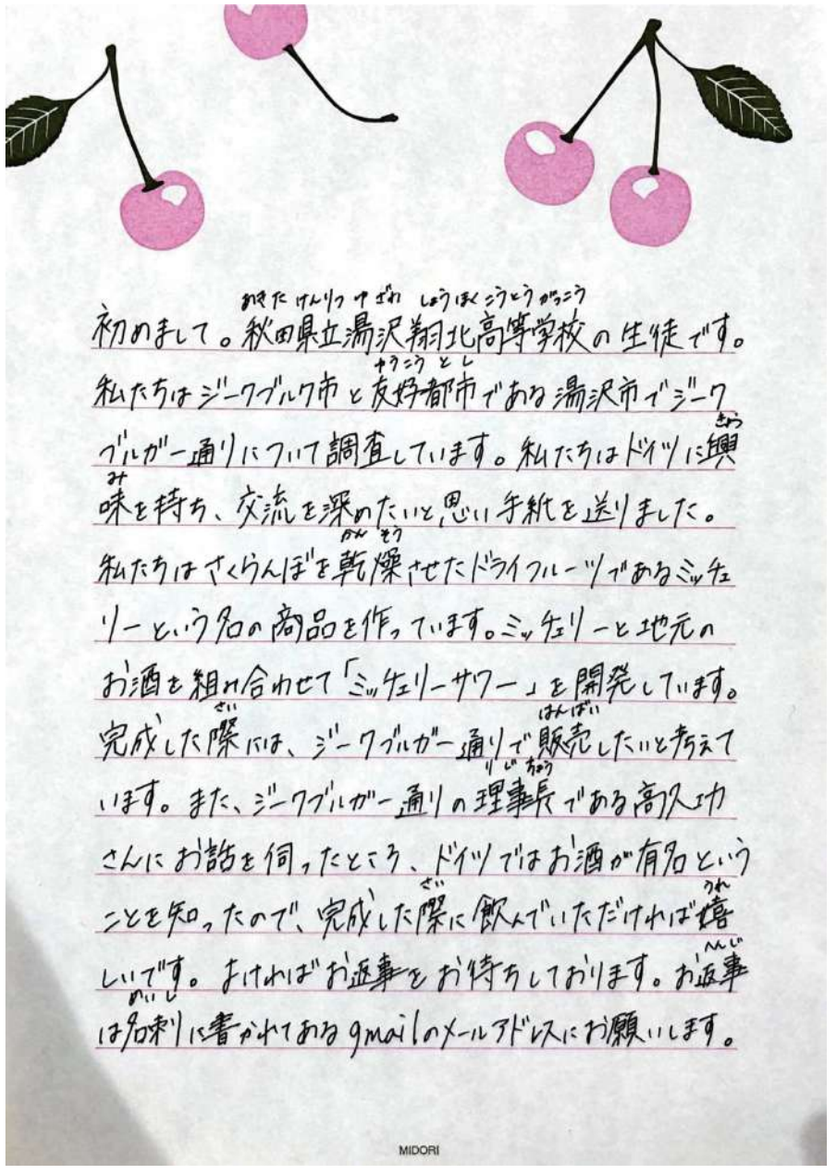
理事長の「高久 功」さん　写真提供：happiness

ジークブルガー通り　写真提供：happiness

煉瓦作りの通りにドイツ様式の建築が並ぶ「ジークブルガー通り」。湯沢の中心商店街の一つの通りだけが、ドイツの町並みになっている。湯沢翔北高校の「happiness」は、この異空間とも言える個性的な通りに注目し、観察をはじめた。それぞれの店舗に鋳物のドイツらしい看板が掲げられ、常に通路が綺麗に保たれていること等に気づいていく学生たち。

そうしたなかで、そもそもこの通りがどうしてドイツ様式になったのか？　そのきっかけを調査していくと、ある理髪店の理事長さんの存在に行き着く。通りの歴史、通りができた経緯などについて理事長さんに何度もお話いただき聞いていくと、もうジークブルガー通りとは理事長さんの存在そのものなのかもしれない……と思いはじめるのだった。

そして後日 happiness のメンバーは、なんと……



初めまして。秋田県立湯沢翔北高等学校の生徒です。
私たちはジークブルク市と友好都市である湯沢市でジーク
ブルガー通りについて調査しています。私たちはドイツに興
味を持ち、交流を深めたいと思い手紙を送りました。
私たちはさくらんぼを乾燥させたドライフルーツであるミッチェ
リーという名の商品を作っています。ミッチェリーと地元の
お酒を組み合わせて「ミッチェリーサワー」を開発しています。
完成した際には、ジークブルガー通りで販売したいと考えて
います。また、ジークブルガー通りの理事長である高久功
さんにお話を伺ったところ、ドイツではお酒が有名という
ことを知ったので、完成した際に飲んでいただければ嬉
しいです。よければお返事をお待ちしております。お返事
は名刺に書かれてあるgmailのメールアドレスにお願いします。

MIDORI

ドイツのジークブルク市に手紙を書いちゃった！

12月の中間報告会、「とことん理事長さんに会いに行ってごらん！」とのアドバイスを受け、改めて理事長さんのもとにしつこく会いにいった学生たち。ジークブルガー通りを追いかけていたはずが、気がつくと、理事長さんの好きな食べ物、部活動、美容師になったきっかけ、東日本大震災のときのことなど、理事長さんという一人の人間の生態を探るに至っていた。

理事長さん、そしてお隣の電気屋さんとの関係性の構築が、チームhappiness の地域とのつながり・成果となった。「地域とつながる」とは、知ること、発信すること、そして人と人をつなげることだと気づく。そして、思っていた以上に、自分たちは地元のことが好きだったんだということに気がつくことができたhappiness。つまりそれは今回関わった人たちが、湯沢の良いところへ興味を持たせてくれたという証。みんなが秋田を発展させようと活動していることを知り、そんな人たちに出会えたことが彼らにとって嬉しいことだった。そしてその一方で、地域の人たちにはもっともっと秋田のことを伝えてほしい（教えてほしい）と思った。「こんなのあるよ」って教えてもらわないとわからない……、それが今回のプロジェクトでhappiness が感じた素直な気持ちだった。

そうして、happiness の地域へのつながりは、理事長という一人の個人から、世界へと広がる。そうドイツのジークブルク市とのつながりを求め、なんとジークブルク市へ実際に手紙を書いてしまったhappiness メンバー。こうして何気なく見ていた通学路としての道は、自分たちの新たな道を切り開く道として愛され世界に続いていく。

ドイツのジークブルク市から、お返事が届いた！

秋田県立翔北高等学校の佐々木先生と生徒さんたちへ

ご丁寧なお手紙、ありがとうございました。昨日、郵便ポストの中に入っていて、とても驚いたと同時に嬉しかったです。私はジークブルク市のAnno-Gymnasium の教師です。現在、私の学校では約30人の生徒が日本語を学んでいますが、日本や日本の人々にとても興味を持っています。

ドイツのお酒の文化に興味を持ってもらえたことは嬉しいです。確かにドイツでは、ビールを中心としたアルコール製造の文化が長く続いています。世界で最もビールを生産し、消費している国のひとつです。ビールは私たちの文化に深く根ざしています。例えば、多くの町にはいわゆる「Brauhaus」（醸造所）があり、独自のレシピとドイツ「Reinheitsgebot」（ビールの純正法）に基づいてビールが製造されています。ジークブルグには、地元の Brauhaus で作られた独自のビールもあります。しかし、ドイツはワイン生産にも一役買っています。ドイツといえば、リースリングなどの白ワインが有名ですが、そのブドウはライン川、マイン川、モーゼル川、アール川沿いのブドウ畑で育ちます。イェーガーマイスターのようなハーブ系リキュールなど、アルコール度数の高いスピリッツもドイツでは生産され、広く飲まれています。

翔北高等学校で行っているプロジェクトはとても面白そうですね。手紙には、ドライチェリーと地酒を組み合わせて、湯沢のジークブルガー通りで販売したいと書いてありますね。また、さくらんぼの乾燥に地熱を利用している点も非常に興味深いと思います。このプロジェクトについて詳しく教えてくださいませんか。どのようにして生まれ、どのような状況で学校で行われているのでしょうか。これについて、例えば私の日本語の授業で使えるような簡単な情報資料があれば、非常にありがたいです。

もちろん、出来上がった製品の味にも興味がありますし、飲む機会があればとても光栄です。私たちは日本に大変興味を持っており、またジークブルク市と湯沢市の関係を深めることにも大きな関心を持っていますので、お返事をお待ちしておりますし、活発な交流を期待しています。よろしくお願いします。

Alexander Griessl
シークブルク市の Anno-Gymnasium
（アノ・ギムナジウム）

商品開発に立ち止まる。

momosada

新屋高校一年生の生徒会チーム、その名も「momosada」。新屋の有名なお菓子屋さんとタッグを組んで商品開発をしようと企画するも、有名なお店と連携することが「地域とつながること」と言えるのか……と、立ち止まってしまう。地域と高校生が商品開発を行うという、どこか形式張って見える手段・方法を疑ってみる姿勢がそこにはあった。

地域とつながる前に、チーム内でのつながりが希薄なのでは……と気づき、自己紹介シートを作成してメンバーそれぞれの趣味・特技を知り合おうとした momosada。お互いのことを何も知らなかった一人ひとりがそれぞれを知り、チームを実感しあった先に獲得した一体感がいよいよ地域のことを知り、地域につながろうとする原動力となっていく。

写真提供：momosada

地域とつながる その前に するべきこと

生徒会メンバーの一年生チームはコロナ禍なこともあり、本プロジェクトへの参加当初はまだ学生同士の面識がなかった。先生から紹介されてプログラムに参加し、課題に取り組むものの、お互い意見を言わずに腹の探り合いが続いていた。話し合う人は固定化されてしまっているため、議論が深まらない。そうなると、表面的なアイデアで終始し、誰の想いものらない企画ばかりでプロジェクトは進んでいた。

プロジェクトの中間報告会で「商品開発を有名店と行って、誰が喜ぶのだろうか？」と問われて、立ち止まってしまったチーム momosada。誰の気持ちものっていない故に生まれた、誰でも思いつきそうな形式張った手段・方法・アイデアだった。

「他のチームの取り組みをみて、どうしてあんなアイデアが出てくるのか、すごいと思った」とチーム間での内省を重ね、地域の前にチームとつながるべく、今一度真っさらな状態から本プロジェクトに取り組んだ momosada。互いの魅力に気づき、お互いに意見を言い合いながら進め、チームの参加率・一体感がぐっと上がっていった。

チームとつながれば、地域ともつながれるはず。そうして一丸となったチームが地域を駆けずり回って繰り広げた「地域の魅力インタビュー」は、きっと未来の「地域開発」につながっていくと信じている。

シャッター開けちゃった！

ちゃどう

何があるかなんて開けた先にしか分からないし、何かが動くかもしれないじゃんね！

湯沢のアーケード商店街であるサンロードを日々通う湯沢翔北高校3年生女子チーム「ちゃどう」。審査課題の1分間動画では、商店街をおしゃべりしながら散策し、尺が長くなり過ぎたので早送りで編集して提出しちゃう、そんな前のめりな気質！湯沢のすももをつかったお菓子の販売にあわせ、サンロードの未来を考えるイベントを企画するも、参加者はほとんど集まらず厳しい現実を知る。しかし、やったことに後悔なし。商店街のすべてのシャッターを開けちゃおう的な企画を役場に直談判するも、実現は厳しいと断られる……が、しかしそれでも「開けちゃった！」と言って、シャッターをいくつか開けてみちゃう行動力。何があるかなんて、開けた先にしかわからないし、何かが動くかもしれないじゃんね！

写真提供：ちゃどう（映像課題より）

ちゃどうの気持ちを未来へ

大人と若者を中和する

サンロードの未来を考えたいと「サンロード未来会議」を開いても人はほとんど来なかった。わかっていたけど現実になると寂しかった。開こうと思ったのは、地域の人同士を会話させたかったから。会話をしないとお互いの考えがわからないし、話し合うから次のアイデアが出てくる。そういうコミュニティみたいなものを作りたかった。

今現在、商店街には57店舗あって30店舗が閉まっている。わたしたちの世代はシャッターが閉まっているところしか見たことがないから、シャッターの向こうが気になっていた。全部のシャッターを開けてみたいと、市役所に相談しに行ったけど難しいとの返答……。開けた先に、わたしたちが考えていることを聞かれたけど、そんなのわからない。でも、開けてみないと何もはじまらないじゃんって思った。

湯沢でやりたかったことの3割もできていないから、高校を卒業してからも活動する。商店街のお店を借りて、若者で朝市を開きたいし、みんながやりたいお店について話し合うワークショップも開きたい。行動すると、湯沢が変わる気がするから諦められない。

私たちが思う『地域とつながる』とは、若者と大人の「もっとこうしたいよね」という思いを共有すること。昔からいた人と新しく参入してきた人は仲が悪いから、会議をする機会を私たちがつくれば、若者と大人をつなぐことができるはず。

このプロジェクトで、もっと地域とつながりたいと強く思った。良いものが地域にあるのに知らない若者がいるのはもったいないし、大人と若者が混じり合って中和することができたら、きっと新しいものができるはず！

ちゃどう

写ルンです20個で覗いてみました

Araya Melt Down

秋田公立美術大学から参加の女子チーム「Araya Melt Down」。通学路を自分で観察するよりも、いろんな人が見ているものが気になるし、その視点を観察したい。そんな想いから、なんと「写ルンです」を20個も購入して通学路に設置（放置？）し、拾った人に自由に撮影してもらう仕掛けを考案。知らない誰かが見た景色を通して、その人の目線を覗き観るような行為に観察の意味を深めていく美大女子チーム。そこには小手先のテクニックに頼らない、表現の手前にあるべき純粋な好奇心が溢れていた。

誰が撮影したのか分からない写真を、撮影者となんの関係性もないと思われる地域の人たちが見て手に取り、何かを感じる行為のデザイン。こんなふうに私たちの地域は無意識に繋がってるのかもしれない。

誰かと誰かは、無意識に繋がっている

写真提供：Araya Melt Down

想定外にも何者かに盗まれてしまった「写ルンです」も数多くあるけど、
その〝カメラが盗まれた〟という事実・結果も、地域とつながるということの本当で、生の出来事だと感じたい

「人に伝える」「人に見てもらう」ということを意識し大切にすることで、自分たちの想い・表現はより強度を増し、拡がりを見せていく。

秋田公立美術大学に通いながらも、これまでギャラリーで自分たちの表現を地域にさらけ出した経験のなかった「Araya Melt Down」の5人は、本プロジェクトの最終成果展の現場で、自分たちの表現が人に、そして地域に届いていくことを実感し、成長していく姿を見せてくれた。

そして「また〝写ルンです〟買って、自主的にこのプロジェクトを続けていきます！」と息込み、地域への繋がりの〝続き〟を予感させてくれた。

商品開発に立ち止まる。

国語、算数、理科、デザイン!
理事長を知る
国語・算数・理科・デザイン!

バズらせない回覧板
幕を下ろすので結構です

シャッター開けちゃった!

国語、算数、理科、デザイン!

国語・算数・理科・デザイン!
僕らの理想的無人販売所

写ルンですで20個で覗いてみました。

「国語・算数・理科・デザイン!」運営チーム
Team OD(お尻を出す!)

国語、算数、理科、デザイン!
理事長を知る

「国語・算数・理科・デザイン！」最終成果展 2021.3.14 @ココラボラトリー

秋田からデザインを軸にする

本プロジェクトの参加者募集チラシに大きくレイアウトされた秋田県章。その一番近くに〝デザイン〟の文字を配置する。ディレクションに入った澁谷デザイン事務所の澁谷さんによるこだわりで、この事業で達成できた最初の成果でした。ありたい社会を描き、実感をもとに活動を設計していく。その一歩目は、身の回りにあるモノ、コト、ヒトを観察してメッセージを見出す。受け取ったメッセージの先に願いや問いを見出し、ありたい姿に向けて取り組む。その全体性をもって〝デザイン〟と我々は考えます。

事業名にある〝若者と地域をつなぐ〟を形にするのは、とても抽象的で捉えづらい言葉。事業の目標も商品開発など、浮遊する言葉のイメージが先行している。事業内容から成果までの流れを実感が伴うものにするために、再定義することからはじめました。言葉の観察からはじめ、事業をデザインすることに、私たちがまず取り組みました。

事業デザインの議論に常に運営メンバーだけでなく秋田県庁の担当者の方にも同席頂けたことは、この事業成果達成において重要なことでした。いつでも議論へ参加し、市民の理解を得るための論理をともに積み重ねた時間。もちろん、衝突して意見が通らないこともありましたが、共に事業を作るチームでいられたこと、それがこの事業の中核であったことも含め、参加者の気持ちと運営の気持ちがお互いに反映できる事業でした。

参加学生の取り組みでも、常にプロセス（過程）にこだわりました。実感を伴わずに企画案が出てくるときは事業の目的を問い直し、ステップが早すぎるときは足元を辛抱強く観察することを求めました。そして、私たち大人が繰り返す地域での問題・失敗をしっかり伝えました。商品開発が、イルミネーションが、必ずしも地域を良くするとは限らないこと。事業の狙いや過程がありたい姿を描かずに進み、形になったけど中身が伴わなかった過去の事例についても正直に伝えました。希望をもった参加学生には酷なことをしたと思います。でも、私たちが問われなければならないことをしっかり受けとめた上で、参加者には繰り返さないように厳しい問いを投げかけました。

そして、学生はすべての問いに向き合い続けてくれました。成果展で紹介した言葉たちは、どれも参加者が真摯に問いから目をそらさなかったからこそ生まれたものでした。「バズらせない方法」、「シャッター開けちゃった」、「商品開発に立ち止まる」、「幕を下ろすので結構です」。関わった人との関係も、自身の心にとっても決して楽なことではなく、タフな取組みだったと思います。しかし、半年間のプログラムを通してゆっくりでも正面から問いに向き合ってくれたことに感謝しつつ、必ず乗り越えてくれると信じ続けてくれた秋田県庁の方々と運営チームを誇りに思います。

真正面から地域社会と向き合い、ありたい姿に向けて厳しい問いに向かい続ける。秋田は、それができる。この一年で秋田はみんなでデザインできると確信しました。これからもあり続ける秋田で、最初に一歩を踏み出せました。秋田からデザインを軸にする。秋田のみなさんと一緒に取り組めばできることです。

一般社団法人ドチャベンジャーズ
柳澤 龍